

特集

観察し、聞き取り、表現する

— 私たち自身の心を働かせること —



'13.2.15  
Yoshie

### 都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

巻頭文：「きく」ことの意味と葛藤・課題……………田中夏子……………4

**特集** 観察し、聞き取り、表現する — 私たち自身の心を働かせること —

■自然観察とフィールド実践、交流

本物に出合う喜び……………砂田真宏……………6

生活科「町探検」として都留文科大学バイオトープを見学する — 谷村第一小学校二学年 — ……小幡恵美子……………7

市民とともにカワラナデシコの咲く町へ……………坂田有紀子……………8

田んぼクラブ……………今野舜……………10

森林フィールドを通しての農山村再生の模索……………泉桂子……………11

畑に通うこと — 中屋敷での畑仕事から — ……持田睦乃……………12

都留フィールド・ミュージアムの視察を終えて……………井口三月……………13

■種の保存の取り組み

「たねの自由」勉強会を終えて……………林公則……………14

■地域の生態 — その変化の兆候

尾崎山の動物事情 — センサーカメラと地域への聴き取りからみえてきたこと……………西丸堯宏……………15

イワツバメの繁殖コロニーの動態……………西教生……………16

■ 地域の生体—その変化の兆候

テントウムシの越冬を観察する

鈴木陽花

■ フィールド活動を表現する

地域を「探検」する喜びと『フィールド・ノート』

香西恵

『フィールド・ノート』編集に参加して

3年目で見えてきたもの

前澤志依

第9回 地域交流研究フォーラム「フィールド・ノート10周年からみえる未来」に参加して

『フィールド・ノート』の読者として

上田聖子

読者と考える『フィールド・ノート』のこれまでとこれから

藤森美紀

『フィールド・ノート』10年の重みとこれから

別符沙都樹

大学での博物館授業と駅舎での展示

畑山ちえ

わたしとあなたの都留アルバム事業をとおして

森屋雅幸

大豆栽培を通して都留で学んだこと

崎田史浩

地域・故郷を思う—東日本大震災と私たち—(その4)

岩手県釜石市における聞き取り調査に参加して

宮下凌瑚

第15回「南都留地域教育フォーラム」

立川博

県民コミュニティカレッジ「イギリスの文化」に参加して「人から学ぶ」、「人と一緒に学ぶ」ということの面白さ

倉内紀子

講演会「隠されたアジアの紛争地〜最前線で見たその虚と実」を開催して

ナガランド〜植民地支配から連綿とつづく先住民弾圧

佐伯奈津子

インターンシップを終えて

竹田和海

インターンシップから学んだバリアフリー観光の可能性

重本香純

31

31

30

28

27

26

24

23

22

21

21

20

19

18

17

# 葛藤・課題

## 巻頭文

田中夏子

### ◆はじめに「聴く」か「聞く」か

「きく」ということをめぐって、巻頭言依頼をいただいたときから、悩んでいたのは、タイトルの漢字表記を「聴く」とするか「聞く」とするかということだった。「聴」の字源を紐解くと、「まっすぐに耳を向けてききとる」、「耳を澄ましてきく」こととある。これに対して「聞く」は、「よくわからないこと、へだたったことが、耳にはいる。へだたりをこえてきこえる」こととされる。前者が「きく」姿勢として能動的、後者は遠くから届けられた音に出あうという意味で受動的ともいえる。だが同時に、前者が眼前で向き合う人との直接的な関係の中で行なわれる行為なのに対し、後者は直接向き合う関係ではない人の声を受け止める行為ということならば、これもまた聞く側の能動性を必要とするといえよう。以下に記すことの内容に照らして、私にとつての「きく」は、状況としては「聴く」に近い。しかし、その眼前にある人が内側に持つ「へだたり」「わからなさ」は、「聴く」行為を重ねる中であつても容易に乗り越えられるものではない、そのことも痛感している。「わからなさ」を越えて何かが届くのを待つしかないということであれば「聞く」に近い。だからタイトルの漢字は、どちらかを選ぶことができず、「きく」とした。

本稿では、「きく」という行為をめぐって筆者が本学の教育活動に携わる中で考えたことを二つに絞って記したい。一点目は、「きく」ことが、社会

関係を生み出していく際に担っている役割の大きさについて、そして二点目は、「きく」ことを深めていくための課題である。

### ◆人が大事にされるための土台としての「きく」

都留に着任して間もなく、私は学生たちと都留市駅周辺の商店街にうかがつて、店主さんらからお話をうかがう授業に取り組んだ。学生たちは都留市で生活していても、最寄りのスーパーで事足りるため、商店街に足を踏み入れることはめったにない。しかし一つひとつのお店でじっくりお話をうかがうと、店主さんたちはそれぞれ独自の「きく」技を持っていることに気づかされる。たとえばある薬局でのお話。市立病院で診察を終え、処方箋を握りしめたお年寄りが立ちよつていく薬局である。処方箋を待つている間、お年寄りが、健康の不安について、実にたくさんのお話を話し出すという。店主さんは次のように言う。「薬局の仕事は」〈売る〉だけが仕事ではありません。お客さんの話・体調を見聞きし、カウンセリング的な対応も求められる時代。：中略：今の病院は診療時間が短くて、お年寄りなどは、自分の体のつらい様子をお医者さんや看護婦さんに話したいのだけど、とても病院ではそれをじっくり聴いてはもらえない。だから処方箋もつてうちに来たお客さんの話をゆっくりうかがう。そういうことが大事になっています」。

同店では、店内の一角に落ち着いた雰囲気のスペースを設置し、健康不安の相談にのる。このお店

# 「きく」ことの意味と

をはじめ、いくつかのお店におじゃまをして、学生たちと1〜2時間滞在する間にも、生活の不安や困りごとを持って訪ねてくるお客の声に、丁寧に耳を傾ける店主らの姿に接する機会が多かった。私は仕事柄、人が大事にされる地域とはどのような地域だろうかと考えているが、その基礎的な条件の一つが、こうした「きちんと聞き合う」関係の存在だと気付かされた場面でもあった。この「きちんと聞き合う」関係は、なかなか記録には残されない営みであるだけに、その一端を10年にわたって書き記してきたという意味で、地域交流研究センターの『フィールド・ノート』の存在は重たいことも添えておきたい。

## ◆葛藤を押しつ「きくこと」の意味

上記に述べた、「きく」ことが社会関係を紡ぐ上で重要との認識は、現在では広く共有され、さまざまな場で「聞き書き」が自覚的に取り組まれるようになってきている。そうした取り組みにおいて、「きくこと」は、「普通に生きた人たちが、人生で何を大事にしているのか、その人にとって一番の事件は何かなどをつないでいくと、より確かな歴史ができていく。つまり後世への贈り物」(井上ひさし『日本聞き書き学会報』vol.1(2001年12月10日)より)として位置づけられ、たとえば、高校生たちが「森・海・川の名手・名人」に知恵・技・生き方を聞く「森の甲子園」等、教育の現場はもとより、ターミナルケアに取り組む福祉・医療の場等にも広がってきた。

東日本大震災のボランティア活動の一環としても

各地で「聞き書き隊」が編成され、防災に関わる教訓のみならず、想像し難い恐怖、そして膨大な悲しみや惜別の思いが記録されつつある。本誌でも紹介している通り、都留文科大学の学生たちもそうした取り組みにさまざまな形で関わっている。

私もその一端に参加させていたがながら、あらためて「きくこと」の重要性と難しさを実感している。とくに震災に関わる「ききとり」は、被災された方たちの圧倒的な喪失感を再び掘り起こすことから始まるため、きくことによって、語り手に解放よりも苦痛をもたらす局面が少なくない。そうした事情から、とくに被災後3カ月時点で実施した「ききとり」に対しては、「この時点でききとりだなんて…」と、実施する側にも葛藤が伴った。

しかしなお、「ききとり」の継続に意味があると考えているのは、被災なされた方の次の言葉に支えられてのことである。「あまりにも生々しく、苦しいから」今は多くは語らないでしょうが、…(徐々に語ろうという気持ちへと)変わってきます。むしろ自分たちの体験が、活かされればいい、そういう気持ちに変わっていく時期が来ますよ。ただ、その変わっていく時期と、風化する時期とは、同じになるのかもしれない」。被災の体験が客観化され、「語ってもいい」と思うその時期は、同時に「風化が始まる時期とも重なる」というその警告をうかがったとき、「きくこと」の葛藤に耐えながら、やはりこの作業を継続していくことの重要性と課題を再認識させられた。

(たなか なつこ・本学環境・コミュニケーション創造専攻教員)

わたくしたちの地域交流では、観察や実践に向うこと、地域の自然や人ひとの暮らしから直接に学ぶことを大事にしてみました。その地域観察・交流の諸実践を、「観察し、聞き取り、表現する」という角度を意識して特集しました。

特集内容は、(1) 自然観察や稲作・畑仕事、森づくりのフィールド実践・交流、(2) 種子の保存をめぐる、(3) 地域の生態の変化への注目、(4) 『フィールド・ノート』の編集や展示活動および「大豆生活」の実践と表現のいとなみ、という構成をとりました。

これらの特集内容からは、私たち自身の五感と精神を働かせる共同の取り組みがもつゆたかな諸価値が浮かび上がっています。同時に、それぞれのフィールド実践が経験しつつある、さまざまな苦勞・困難、課題なども見えてきます。

## 自然観察とフィールド実践、交流

# 本物に出合う喜び

■ 砂田真宏

2012年12月18日(火)の夕方、都留文科大附属小学校でムササビ観察会を行いました。参加したのは附属小の4年生18人とその保護者のかた6人。都留文科大からは興味のある学生が観察会のスタッフとして12人参加しました。

都留文科大附属小学校は都留市大野にあります。校舎のすぐ裏には林が広がっていて、生き物の観察にはとてもいい立地です。本当にうらやましいことに、朝学校の窓からはリスを見ることができ、そんな学校です。4年生の子どもたちは授業で地域の身近な生き物を扱っていて、すでにリス、ヒミズ、アカネズミ、ムササビなどの学習をしていました。ムササビは学校から見えるスギとケヤキに巣箱をかけ、現在2頭のムササビが入っているそうです。しかし、ムササビが巣箱から出て活動するのは夜。まだ、子どもたちはその姿を見ることがないそうでした。

週に3、4回程度観察会に先立って事前に観察を行ないました。12月の夕方は30分も外でじっと観察して

いると体が芯から冷えます。あまり長時間待つと参加者は集中力が切れてしまいます。そのためにある程度の出巢時間を事前観察からつかんでおきます。また滑走路の確認のほか、どこから見るとムササビの滑空がよく見えるかなど、観察会にあたって見ておかなければいけないポイントがたくさんあります。

観察会当日、附属小学校に行く子どもたちは運動場で元気に遊んでいました。学生スタッフがあいさつをし、観察の説明に入りました。校舎の裏に移動後、息を潜めてムササビの出巢を待ちます。しばらく待っていると、巣箱からムササビが顔を出しました。「ムササビが顔を出しているの見えるかな？」そう聞くと、「うん」と返事がありました。この日私たちの前に現れたのは1匹。しばらく巣箱の穴から外のようすをうかがった後、すばやく巣箱から出てスギの木を上っていきました。姿が見えなくなっても、みんなの視線は木の上に釘付けです。次の瞬間、皮膚を大きく広げたムササビが頭上をふわりと滑空していきまし

た。ほとんどの子どもたちが滑空のようすを見ることのできたと言っていました。しかし、一瞬の出来事だったため、見逃してしまった子どもも数人いたようです。教室に戻り、ムササビについてのミニ講座を行いました。ムササビの着ぐるみを着た学生がムササビの体について説明したり、クイズを交えたりしながらムササビの食べ物について紹介しました。

観察会終了後に行なった参加者アンケートには、「ムササビは自分が思っていたより大きかったのでびっくりした」「ムササビがとてもはやくて目でおいつくのがとても大変だった」といった感想がありました。多くの子どもたちが、本物を見てこそその感想を抱いたことが伝わってきました。保護者のかたがたからは、「子どもたちにも分かりやすい解説でよかった」という感想をいただきました。しかし、見られなかったかたもいらっしやったので、全員が観察できる観察会を目指していくことが課題であると感じました。

(すなだ まさひろ・初等教育学科4年)



## 生活科「町探検」として都留文科大学ビオトープを見学する

— 谷村第一小学校二学年 —

■小幡恵美子

二年生の生活科の「町探検」では、自分たちが住んでいる地域の人々や場所に関心をもって関わりを深めることを目標としています。本校では、春と夏には学校周辺の探検を行ない、秋の「町探検」では、田原・楽山地区の見学で計画を進めてきました。

また併行して、十月五日には生活科の授業で北垣憲仁先生をお招きして、夏休みに採集した「セミの抜け殻」を使ったマップ作りを行ないました。完成した地図から分かることや昆虫の生態や脱皮についてもお話をさせていただきました。この授業をきっかけに、子どもたちは自然や生き物に強い関心をもつようになりました。さらに、秋の探検場所として大学構内のビオトープも紹介していただきました。

「秋の町探検」は、十月二十四日に実施しました。学校から金山神社を経て、都留文科大学までを歩きまわりました。合同庁舎から大学に向かう途中の街路樹もきれいに色づき、秋を感じることができました。大学に着いてからは、まず北垣先生から「メダカ」の生態について説明をしていただきました。寿命、体の特徴、オスとメスの見分け方、えさなどについて、子どもたちは、ひと言も聞き逃さないようにと話に聞き入っていました。その後は、フィールド・ミュージアムの大学生からの「メダカクイズ」へと続き、子どもたちは楽しくメダカ学習のまとめをすることができました。さ

らに、大学で育てているオスとメスのメダカを各クラスに二匹ずついただきました。最後に、図書館隣のビオトープを見学して木や草花の名前を確かめたり、虫を見つけたりしました。珍しいガマの花帆もあり、驚きの声が上がりました。近くの大学に植物や昆虫が共生している場所があることを知って、秘密の場所を見つけたような誇らしい気分だったようです。

秋の町探検では、北垣先生に多大なるご協力をいただいたおかげで、実際に動植物に触れながら学習することができました。このような機会を設けていただいた北垣先生には、心より感謝申し上げます。今回の探検で高まってきた生き物や自然への興味を、子どもたちがこれからも持ち続けてくれることを願っています。

(おはた えみこ・谷村第一小学校教諭)



## 市民とともにカワラナデシコの咲く町へ

■坂田有紀子

皆さんはカワラナデシコという植物をご存知ですか？ カワラナデシコは河原や日当りの良い草地に生える多年草で、日本女性の代名詞である大和撫子の語源となった植物です。近年、サッカー女子<sup>1</sup>などで「ジャパン」の活躍で一躍有名になったカワラナデシコですが、人との関わりの歴史は古く、古くは万葉集や古今集などに詠まれています。秋の七草の一つであることから、昔から人々に親しまれてきた身近な植物だったことが伺えます。ところが、近年、河川改修や土地利用の変化などによって自生地が減少し、各地で絶滅の危機に瀕しています。県単位のレッドデータブックでは、沖縄県、埼玉県、岩手県など5県で絶滅危惧種として挙げられています。都留市でも30年ほど前までは、河原がピンク色に染まって見えるほどたくさん咲いていたようですが、最近ほとんど見かけません。

◆ 本学初等教育学科の生物学研究室では、5年前からこのカワラナデシコの保全のための研究に取り組んでいます。毎年4年生が卒業研究として、一年間かけて地道な野外調査や実験を行なっているのですが、この研究は地域の方々の協力なくしては成りたちません。そもそもカワラナデシコの研究を始めたのも、「昔は都留の河原にもカワラナデシコがいっぱい生えていて

ね、花が咲くころはあたり一面ピンク色に染まって見えるくらいだったけど、今は全然だね」という市民の言葉がきっかけでした。私もピンク色に染まった河原を見てみたい、子どもたちにもそんな自然を原風景として残してあげたい、そう思い、学生たちと研究を始めました。最初の年は、まず都留市内のカワラナデシコの分布を調査することから始めました。その際にも、大勢の市民の方がカワラナデシコの生息情報を寄せてくださいました。学生たちが調査をしていると、暖かい声をかけてくださったり、差し入れをいただいたこともありました。なかでも、市内の保育園の園長先生はとて熱心で、生息環境の悪化した近くの川から株を移植・保護し、種子を採取して園児たちとカワラナデシコを育て、増やす活動を行なっています。三吉地区「協同の町づくり協議会」の会長さんは、カワラナデシコについて市民のための勉強会をぜひ開いて欲しいと、講演会を企画・開催してくださいました。協議会や講演会では、いつも地域の心ある方たちが参加してくださり、私や学生たちも元氣と勇氣をもらっています。

◆ さて、この5年間、総勢17名の学生がカワラナデシコの研究に参加し、都留市内での分布や、カワラナデシコの生育条件、自生地でのカワラナデシコの生活史

や生態、種子生産量、種子の生産量に影響をあたえる要因などがだんだんわかってきました。それと同時にカワラナデシコの保全のためにはどうしたら良いか、ということも少しずつですが見えてきたように思います。しかし、この研究の成果はこれだけではありません。何よりも大きい成果は、研究に参加した学生たちの意識が変わってきたことです。参加した学生たちの感想の1、2を紹介しましょう。

この研究を始めるまでは、この豊かな自然あふれる都留の自然環境が変化しているということに気がつくことはなかった。しかし、実際自分の目で見て調べることで、あまりの外来種の多さに驚いた。しかし、私たちの記憶に残っている河川のイメージは、



調査風景

■自然観察とフィールド実践、交流

既にその外来種に覆われた現在と似た風景だったように感じている。地域住民の方の話によれば、僅か20〜30年前まではカワラナデシコが頻繁に見られた美しい河川だったようだ。私もその当時のような色とりどりの花が一面を覆う美しい景色を、是非自分の目で見てみたいと感じている。そして、この先の子どもたちも是非そんな景色の中で育まれていって欲しいと願っている。私たちがこれから教員として働く際、この経験を活かして地域に根付いた教育ができるよう頑張っていきたいと思う（2008年度卒業生 古川 峰央さん）。

野外調査を進めていくなかで、カワラナデシコだ



カワラナデシコ

けでなく河原に生育している他の植物にも目を向けることが多く、それら一つひとつの暮らしや生態にも興味を湧いてきた。このようにカワラナデシコやその他の動植物について詳しく調べることににより、それを取り巻く環境や自分たちが住んでいる地域の環境全体に目を向ける機会をもっと増やしていくべきだと思った。私たちと同じ世代、またそれより年下の子どもたちにはカワラナデシコの存在さえ知られていない。自分たちにとって「疎遠」だったものを「身近」に感じてもらい、カワラナデシコに興味・関心を持ってもらうことが、都留市における保全活動の第一歩だと感じた（2008年度卒業生 横田 尚子さん）。

カワラナデシコという生きものを知ることで、地域の生きものや環境に関心が向くようになり、人と自然との関係について、生きものと共存できる社会とはどのような社会なのか、ということまで彼らは考えるようになります。身近な生きものについて知り、考えること、これは現代の学校教育では等閑にされていますが、実はとても大切なことなのではないかと思えます。彼らが全国の小学校で、生物多様性の大切さについて、自然と人との関係について、子供たちと一緒に考えることのできる教員になってくれるだろうと期待しています。



しかしながら、課題もあります。先日（2013年2月18日）、都留市環境保全市民会議主催の講演会でカワラナデシコに関する話をしたところ、市民の方から、「カワラナデシコや地域の生きもの、地域の環境

を保全したいと思っているが、一体何をすればいいのかわからない」「個人がやるべきこと、自治会がすべきこと、行政がすべきこと、それぞれあるはず。それらの連携や情報の共有ができていない」という意見をいただきました。この5年間でカワラナデシコの保全策は見えてきたわけですが、保全策を実行するためにはどうすればいいのか、どのような支援や協同の場を作ればいいのか、ということに関しては全く白紙の状態です。

生きものの保全活動は、地域に広がらなくては意味がありません。大学での研究成果を地域に還元し、地域の方々が行動を起こせるような仕組みを構築していくことが今後の課題です。カワラナデシコの咲く町へ、近くて遠い道のりです。

（さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員）



市民との講演会

## 田んぼクラブ

今野 舜

「田んぼクラブ」は2005年4月に地域交流研究センターの外延活動として始まった取り組みですが、3年前から農業系サークルの一つとして学生主体の活動に移行しました。最近では「一本植え」などの新たな試みにもチャレンジし、水田稲作の面白さや奥深さがさらに追求されています。「田んぼが日常の中にある生活」(初代学生リーダーの言)を経験し、その意味を考える学生が増えてほしいと願っています。2代目学生リーダーの今野舜さんに今年の活動を振り返ってもらいました。(西本勝美・初等教育学科教員)



今年度も、田んぼクラブは、自分たちの手で米づくりに取り組みました。昨年に続き、今年も田んぼの一角に種籾を蒔いて苗を育てる「水苗代」や、田植えの際に苗を一本ずつ植える「一本植え」を行ないました。田植えや稲刈りの他にも、毎日の水の管理や、農薬を使っていないので、定期的な雑草取りも大切な作業の一つです。とくに雑草は放っておくとどんどん生長してしまうので、イネの生長の妨げにならないようにできる限りこまめに取る必要があります。この点は大変ではありますが、逆に雑草の力強さや、農薬の存在を改めて考えさせられるきっかけにもなります。

また、イネの生命力も感じることができました。田植えの直後は風が吹けば倒れてしまいそうな状態でしたが、日がたつにつれ、みるみるうちにたくましく生長していきました。このようなイネの生長を日常的に観察することで、自分たちが育てているということを実感することができました。

そして、地域の方々との関わりもあります。作業をしていると、通りかかった地域の方々が、もっとこうしたほうがいい、というようなアドバイスをしてくださるときがあります。今後、このような貴重な意見も参考にしながら米づくりに取り組んでいきたいと思えます。また、同じ作業のことについても、教えてくだ

さる方によってやり方が異なることもあるので、米づくりの奥深さを知ることができました。

このように、今年も田んぼクラブでは、種蒔きから水の管理、そして収穫まで一年を通して、米づくりのある日常を体験することができました。普段、何げなく食べているご飯を自分たちの手で一から育てることはとても貴重な体験だと思います。収穫したお米はメジャーで分け合います。栽培方法などまだまだ改善の余地はありますが、自分たちで育てたお米はおいしい。だからこそ、これからも続けていきたいと思っています。

(こんの しゅん・社会学科現代社会専攻2年)



## 森林フィールドを通しての 農山村再の模索

■泉 桂子

筆者は二〇〇七年度より都留文科大に勤務し、「農業再生論」を担当しています。この六年間は自分にとっての「農山村再生」模索の旅でもありました。

なかでも森林・林業について地に足を付け、体験的に理解したいという思いがあり、大学の裏山にそのフィールドを設定しました。二〇〇八年四月、山梨県森林環境部の「森づくりコミッション」制度に準じた形式で、都留市市有林を大学が使用する協定を結びました。所在地は本学近傍、名称は「道路（どうじ）の森」とし、広さは約1haです。この森に関わる利害関係者は本学の他、山梨県富士・東部林務環境事務所、都留市役所、作業を請負う森林組合などです。

林相は放置されたアカマツ人工林で、松食いの虫の被害が著しくみられます。上木にケヤキ・コナラ・ミズキ等広葉樹が混交し、風や鳥類による種子散布があることが推測できました。下層はハナイカダ・クロモジが優先しています。いずれも都留の里山を代表する植生です（詳しい報告は西教生、本誌21号、2012年3月発行「夏のねたいり山の実習から」参照）。なお、松食いの虫の被害により、枯損木が散在し、二〇〇九年十月の台風による倒木、同じ年の冬には雪害を受けました。

二〇一〇年春には地域交流研究センタープロジェクトによってアカマツ枯損木を山梨県中央森林組合に伐採・地拵えしてもらい、実習のできる環境を整備しま

した。

さまざまな授業でもこの森林を使用しました。二〇〇八〜一〇年度は、一年生向けの体験授業フィールド体験で樹木観察、手鎌による笹の刈り払いなどを行ない、毎年約七〇名の学生が、貴重な体験を得ました。最も思い出深いのは二〇〇九年からの夏期集中授業「フィールドワーク」（四日間）の測量・毎木測樹実習です。測樹調査では五〇m×三〇mの範囲の樹木を計測します。樹種、胸高直径、樹高、生存・枯死の別などを記録し、現在のアカマツの立木本数は一二一本/ha、二〇〇九年時点でのアカマツの枯損率は四六％でした。

春・夏の恒例行事ともなったこれらの授業は暑さ・虫刺され・ウルシかぶれなど辛い思いの連続であり、またせつかくの造林木の半数近くが枯れ、ヤブ化し、経済的にもタダ同然という現実が筆者にとっても受け入れ難いものでした。まして初学者である学生にとって何が残ったのだろう、自己満足ではなかったか、と反省することばかりです。一つ一つの木に種類があり、個性がありそれが「生物多様性」の根幹であることを学び取ってもらえたら、それが「農山村再生」へのひとつの足がかりになると考えます。

（いずみ けいこ・本学社会科学部環境・コミュニケーション創造専攻教員）



## 畑に通うこと — 中屋敷での畑仕事から —

■ 持田睦乃

2012年3月20日、都留文科大学から歩いて15分ほどのところにある中屋敷という場所で畑仕事を始めました。中屋敷は生き物を観察するフィールドにもなっている場所で、観察小屋が設置されています。その観察小屋の横に、6メートル×5メートルほどの小さな畑を拓きました。

静岡にある私の実家にも小さな畑がありますが、これまで自発的に畑仕事などをするなどはありませんでした。それでも、「都留で過ごす最後の一年に、

なにかやることがないことをやってみよう」という思いがあったということ、その時にちょうど友人に「畑仕事をやってみよう」と誘ってもらったことがきっかけとなり、小さな畑で野菜づくりをすることにしました。畑仕事に関しては、本当に右も左もわからないままのスタートでした。初めのうちは鍬で畑を耕し、均し、畝をきれいに作ることもとても難しく、その一つひとつが私にとって新鮮なものでした。

最初に種をまいたのは、ジャガイモと、サラダ菜や小松菜などの葉物野菜の種です。小さな畑なので、この2種類を植えたあとは、もうほかの作物をいくつも植えるような場所は残っていませんでした。そこで、観察小屋の正面に新しく畑を拓き、その畑で夏野菜を育てはじめました。

春から夏にかけては作物がぐんぐんと生長し、それと同時に雑草も生い茂るようになりました。また作物が大きくなると、それにつられてなのか、ニホンザルやシカ、イノシシなどの大きな動物も畑を訪れるようになりました。訪れる生きものたちによって畑があらされることもしばしばでしたが、私にとっては畑があらされたことへの落胆よりも、彼らの生活を身近に感じられることの楽しさのほうが大きく、畑仕事と同時に行なう生きものの観察は非常に面白いものでした。出会いの楽しさの一方で、私が拓いた畑が、こういった生きものを呼び寄せてしまっているのではないかと

いう不安を抱くこともありました。

秋になると夏野菜の時期も終わりを迎え、ジャガイモや夏野菜を収穫したあと、二人でやるには手一杯だということ、新しく拓いたほうの畑をつぶしてしまふ人も、就職活動や卒業論文の合間に畑仕事をする人が少なくなつたため、仕方ないことであるようにも思えました。冬になるまでの間は大豆や大根を育てましたが、やはり通う回数が減って世話をかけられなくなると、作物の出来も悪くなっていくようでした。

何となく始めた畑仕事、こんなにも面白くまた大変なことだとは、正直思いもよっていませんでした。土に触り野菜を育て、生きものとのちょっとした出会いに感動する日々は、都留という土地で、学生の私だからできた経験なのかもしれないと、しみじみと思う一年間でした。

(もっちだ むつの・社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年)



## 都留フィールド・ミュージアムの視察を終えて

■井口三月

都留フィールド・ミュージアムの活動を間近でみて頂きたいと、北垣（憲仁）先生をお訪ねしたのが、2012年秋、紅葉ももう終盤を迎えた穏やかな日でした。

今回都留にお邪魔したのは、東京都御岳ビクターセンターの解説員一同。都留での取り組みを、これからの活動の参考にさせて頂くことが目的でした。個体群が孤立してしまったムササビの森。生息域は神社の境内で、あるのは数本の御神木のスギとケヤキの大きな森。こんなにも狭いエリアで命を育んでいる事実にも感動しました。そのムササビを守ろうとする子どもたちの存在を知り、また、その子たちが、地域の自然と自分たちの暮らしを共存させてく大きな力に育っていく未来が見えたようで、嬉しくもなりました。

御岳山でもムササビと人の暮らしの共存をはかるべくさまざまな取り組みがなされています。ただ都留と御岳山では背景が大きく違う、でも目指すは、その地域にすむ人もムササビも末永く共に生き続ける世界なんだ！と気づきました。

また、駅の休憩舎の素敵なミニミュージアム。学生の皆さんの手作りの展示。個性豊かに表現し、伝わってくる一生懸命さが人の目を引きつけるのでしよう。荒削りですが一つ一つの素材が丁寧に紹介され、実物

を見たくまりました。

若い学生のみなさんの手で編集された、冊子『フィールドノート』。取り上げる事象が新鮮でおもしろい！やわらかな発想が、地域の魅力を引き出す大きな力になっていと感じました。そして、文章がまた素敵。今度は、こんなおもしろいことを発想する学生さんたちと交流してみたい！

その他にもご紹介頂いた取り組みは、どれも興味深く、御岳山でも活用してみたいと思う事例もたくさん頂きました。また、ここまで形にするのは時間がかかったことを伺い、地域のなかに根ざした活動を作り上げるためには、じっくりと時間をかけ関わりを深めることが大事であることも実感できました。

フィールド・ミュージアムは決まった形は無い、その地域の環境の中で作り出していくもの、都留での取り組みを具体的にを見せて頂いたことで、自分たちの今後の取り組みの形がイメージできました。その目指すGOALは、どこも同じ、人と自然、人と地域社会、人と人が共に生き、つながり、その地域の魅力を再認識し、その魅力を伝える続ける形を作っていくことではないか、それもゆっくり、じっくり。

今後も都留の皆様と、私たちの活動を見直す拠り所として末永く交流が続けていけたらと、願っております。

（いぐち みつき・御岳ビクターセンター解説員）



## 「たねの自由」勉強会を終えて

■ 林 公則

環境コミュニケーション専攻の講義科目「環境政策」で「食と環境」というテーマをとりあげていることをきっかけに、12月17日に、都留文科大学地域交流研究センター「暮らしと仕事」部門とNPO法人都留環境フォーラム共催の学習会で「種子」について講演する機会をいただいた。ここでは、ここ50年ほどの間に、緑の革命や遺伝子革命を経て、農業がいかに工業化されてきたのかを主に語った。人類が農耕を始めてから綿々と受け継ぎ、そして豊かにしてきた作物品種の多様性は、農業会社を中心とする少数の多国籍企業（モンサントなど）の食料支配戦略によって、急速に失われている。品種規制法と特許法の悪用により、農民は自家採種をして自らが望む品種を残していくことを阻まれ、農業化学肥料、機械とともに種子を購入することを強いられる。多くの人々が食をめぐる現状を理解して反対の声をあげなければ、巨大種苗会社が供給する種子以外、いかなる種子も使用を許されない状況にさえなりうる。

日本では高度経済成長期に、大量生産・大量消費が促され、農作物も工業製品のように均一であらねばならないという市場の要求が増大した。その結果、F1品種と呼ばれる種子が一律に普及し、地域に根ざした在来品種が駆逐され、多様性や地域性は喪失した。

このような種子をめぐる危機的な状況のなか、NPO法人都留環境フォーラム代表の加藤大吾さんが

中心となり立ち上げた「無農薬種苗」(<http://www.teforum.org/faney/index.html>) という種苗会社は画期的な意義をもっている。「無農薬種苗」では、無農薬、低肥料でも育成する「強い」種子を販売・拡散することを目的としており、自家採種文化が復活し、在来品種が各地で生み出されることをなにより願っている。

加藤さんとの対談のなかで最も心に残ったのは、「つきつめていくと無農薬、無肥料が一番だよ」という言葉である。後輩が農家を訪れたとき、「いまだき、農薬や化学肥料を使わないで農業はできない。自然農法なんて農業がわからないやつこの言うことだ」というような意見をきいたという。ここには一定の真実が含まれていて、現在販売されているF1品種は農薬や化学肥料を前提にしているので、無農薬で栽培すると作物の収量は激減する。しかし、「無農薬種苗」の種子を使用すれば、種子が厳しい環境に耐える能力を有しているため、数年間、自家採種による当該地域の環境への適応を経ることによって、農薬や化学肥料なしに作物を育成することができる。今回の種子に関する勉強会を通じて、維持可能な農業の実現のために種子が果たす役割の大きさを改めて認識した。普通に生活していると思いを馳せることの少ないテーマだが、その重要性を考えると多くのの人々に種子について関心をもってもらいたい。

(はやしきみのり・本学社会学科非常勤講師)



林公則さん



加藤大吾さん

■地域の生態—その変化の兆候

## 尾崎山の動物事情

センサーカメラと地域への聴き取りからみえてきたこと ■西丸堯宏

尾崎山の北側斜面一帯は、私がつとも親しみをもっているフィールドの一つです。大学在籍時から毎週のようにかよい、今でも月に一度は山歩きを愉しみに出かけます。かつて尾崎山は畑や茅場のあった、今でいう里山と呼ばれるところでした。しかし今では畑や茅場にかような人はいなくなり、その頃と山のようなすはすいぶんと変わってきています。地域の方にお話を伺っても、昔かよっていた頃（戦後から昭和後期まで）のことは想い出を交えてすんなりと教えてくれますが、今のこととなると知っている人はほとんどいません。

そのような事情と私個人の興味が相まって、私は今、地域交流研究センターとの取り組みの一環として、尾崎山に赤外線センサーカメラを設置し、いったいどんな動物たちが暮らしているのか、ということを探っています。つまり戦後から昭和後期と現在とで、尾崎山にいる動物たちに変化はあったか、ということ\*です。今回はその調査のなかでも「中・大型哺乳類」に着目し、簡単に紹介をしたいと思います。

### ■ツキノワグマ

2012年8月10日に、尾崎山でようやくその姿を撮影することができました。尾崎山ではこれまでツキノワグマの痕跡はよく見かけられており、クマ棚や足跡、糞などが毎年確認されていました。つま

り、ツキノワグマは少なくとも私が歩き始めた4年前（2009年）から尾崎山で暮らしていた、と推測できます。ただ姿は一度も確認できていませんでしたので、今回センサーカメラで撮影されたことで、ようやくツキノワグマが暮らしていると確信を得ることができました。昔の尾崎山での目撃情報は今のところなく、おそらく近年になって畑や茅場が森林化したために現れるようになったのかもしれない。

### ■ニホンザル

2012年の5月と8月にそれぞれ1回ずつ撮影されました。おそらく今回の確認が、尾崎山でのニホンザル初確認である可能性が高く（この記録以前にニホンザルをみたという情報をお持ちの方がいましたらご連絡ください）、今後の動向が注目されます。私自身も8月25日に林内で初めてニホンザルの声を聞き、まるで人間のような「ギャー」という声に驚かされました。

ほかにも、センサーカメラではイノシシやニホンジカが多く撮影されています。イノシシは昭和40年代から、ニホンジカはおそらく平成に入ってから見られるようになり、その後個体数をふやしているようです。変化をつづける尾崎山の動物たち。これからも継続して、彼らの暮らしを調べていきたいと思います。



イノシシ



ニホンジカ

### ■脚注・注

\*この記録は地域交流研究センターで資料として蓄積し、将来にわたって活用してもらえよう整備しています。

※原稿中の昔の尾崎山の動物については、十日市場在住の清水禎一さん、渡邊宗男さん、中野新作さんのお話を元にしていきます。詳しくは「都留文科大学生キャンパスとその周辺地域の哺乳類相—2009、2011年の哺乳類調査結果について—」都留文科大学研究紀要（75）をご参照ください。

（にしまる たかひろ・本学社会科学部環境・

コミュニケーション創造専攻卒業生）

## イワツバメの繁殖コロニーの動態

■西 教生

イワツバメは夏鳥として山梨県に渡来します。県内のショッピングセンターや2階建て以上の建物、高速道路の高架下などにドコを使って巣を作ります。これらの場所にはいくつもの巣が集中して作られ、コロニーと呼ばれるます。ツバメのように人家に営巣することはほとんどありません。

私は2003年から、都留文科大学の1号館で繁殖するイワツバメを調べてきました。調査を続けていると、ハシブトガラスによる巣の破壊や卵とヒナの捕食（以下、繁殖妨害）によってコロニーが放棄されたと考えられる事例を観察しましたので、その様子を紹介したいと思います。

2003年に調査を始めたとき、1号館では約50巣でイワツバメが繁殖していました。ハシブトガラスによる繁殖妨害は2006年と2007年にあり、2006年は4巣、2007年は17巣が繁殖妨害にあいました。そこで、この影響を調べるために、コロニーへのイワツバメの渡来日、渡来後の就峙<sup>しゅうせい</sup>個体数（巣をめぐらにする個体数）、繁殖状況を記録して過去の記録と比較しました。

渡来日は、2003年は3月13日、2004年は2月19日、2005年は3月17日、2006年は3月16日、2007年は3月9日、2008年は3月23日、2009年は3月24日でした。2007年に多くの巣が繁殖妨害にあったわけですが、その翌年の2008

年と2009年はコロニーへの渡来が遅くなっています。つぎに、2007～2009年に記録した就峙個体数です。2007年は渡来30日目にも40羽以上が観察されましたが、2008年と2009年の渡来後は5羽以下しか確認されていません。繁殖状況は、ヒナが1羽以上巣立った巣は2007年は10巣でしたが、2008年と2009年は0巣でした。2008年と2009年は巣に泥をついたり、巣材を運び込む行動

も見られなかったため、コロニーが放棄されたと判断しました。



1号館のイワツバメの巣

それではなぜ、2007年にハシブトガラスの繁殖妨害が多かったのでしょうか？ 2006年と2007年以外は、ハシブトガラスによる繁殖妨害は見られません。2007年に繁殖妨害が多かった理由として、この年はコロニーから30m離れた場所にハシブトガラスが営巣していたことが考えられます。なお、2003～2006年、2008～2009年はこの場所でハシブトガラスは営巣していませんでした。

一連の観察から見えてくるのは、イワツバメの営巣地選択として、前年の繁殖成績が関係していそうだということです。つまり、繁殖に成功したコロニーは、翌年も続けて使用する可能性があります。しかしながら、2012年は1号館の4巣でイワツバメの繁殖が再確認されました。このような変遷を繰り返すことが、イワツバメのコロニーの有り様なのかもしれません。身近な鳥の生活史も長期間にわたって調べないと全容は見えてこないようです。

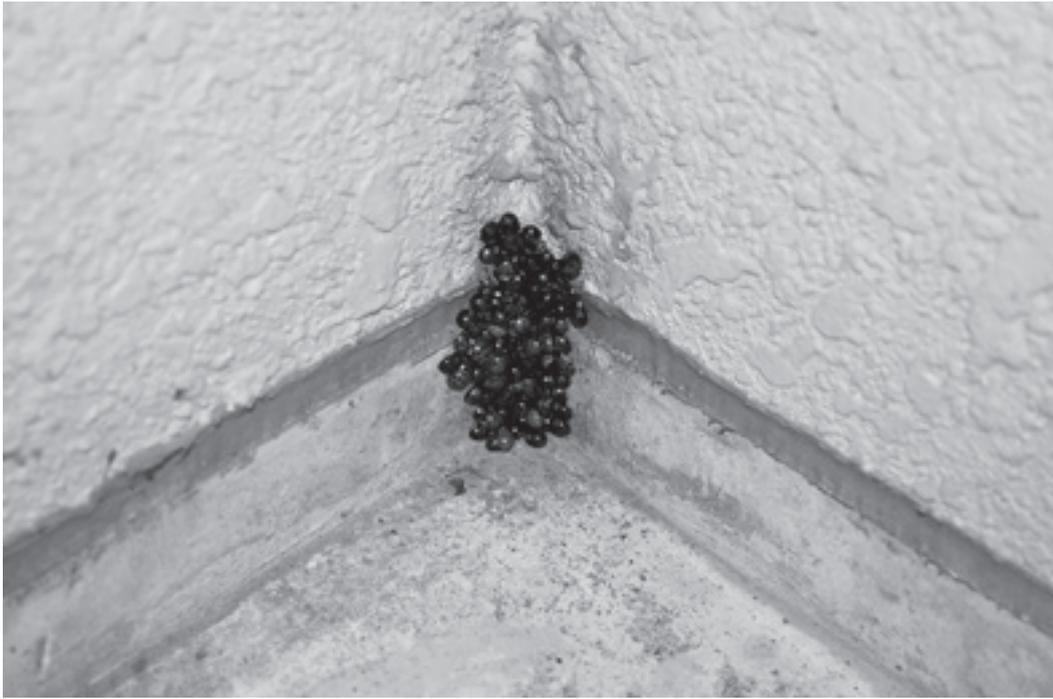
（にし）のりお・本学非常勤講師

飛翔中のイワツバメ



## テントウムシの越冬を観察する

■鈴木陽花



都留文科大学の自然科学棟には、毎年多くのテントウムシたちが越冬のために訪れます。越冬に訪れるのは、ナミテントウという種類のテントウムシです。ナミテントウは、集団で越冬するテントウムシとして知られています。しかし、どうして集団で越冬するのかは、はっきりと解明されていないそうです。私は自然科学棟の西側外階段を調査地として、ナミテントウの越冬集団の形成の過程を記録していくことにしました。集団越冬の不思議に少しでも迫れないかと思ったからです。

10月下旬の秋晴れの日。小さな黒い虫が数个体、自然科学棟のまわりを飛んでいるのが見られました。今年もナミテントウが自然科学棟にやって来たようです。初めて飛来を確認した翌日の10月29日から、さっそく調査を開始しました。

始めは1個体で歩いている個体がちらほら確認できる程度でした。しかし、11月の中旬から全体の個体数は徐々に増加。そして11月中旬にピークの1600個体を数え、12月下旬までには1200個体から1300個体ほどに落ち着きました。過去にも数えたかたのお話によると、多い年には10万個体。少ない

年には200個体ほどと、年によって個体数は大きく変動しているようです。

集団の形成に関しても、徐々に壁の隅や壁面の溝などに大きな集団が目立つようになりました。ただし、集団に新たな個体加わり、単純に集団サイズが増えていくというわけではありませんでした。何度も集合と解体が繰り返され、だんだんと大きな集団が形成されていくことが分かりました。

この要因の一つとして、気温の変化が考えられます。じつさいに、気温が上がると集団サイズは大きくなり、逆に気温が下がると集団サイズは小さくなるという傾向が見られました。また、降水があると集団サイズが小さくなる傾向も見られました。このことから、集団の形成に影響を与える要因は、気温だけでなく降水もあると考えられます。

テントウムシの越冬というひとつの現象と向き合うなかで、始めは思いもしなかった疑問が次から次へと湧き上がってきました。それだけ自然の現象は、さまざま要因がからみあつて起きているということですね。今後はどのような環境を越冬場所として好むのか。どのような生理的特徴から群れるのか。その二つの視点から、本格的に集団越冬の不思議に迫っていきたいです。

(すずき はるか・初等教育学科3年)

## 地域を「探検」する喜びと『フィールド・ノート』

■香西 恵

1月20日、朝から都留市立病院へ向かいました。ここを始発とする循環バスに乗るためです。これは『フィールド・ノート』の次号の企画のひとつです。企画した編集部に同行して、まずは一周バスに乗ってみようというのがこの日の目的。一時間ほどかけてまちを一周したあとは、帰り道「ミュージアム都留」の前でお囃子の演奏会に誘われ、たこ焼きを買って見ていくことに。新町のお囃子保存会が毎月一回発表会を開いていて、今日は新年一回目の演奏だそう。笛はなく、三味線と太鼓をお座敷で、という城下町ならではのこのあたりのお囃子の特徴や、当時の流行歌などもおそわり、思いがけずたのしいひとときをすごしました。

私は『フィールド・ノート』編集部で活動するなかで、こんなふうなさまざまな出会いを重ねてきました。自分で取材に行くことももちろんですが、編集部のなかで他の取材や企画に同行したり参加したりするなかで、さまざまな人や場所、ものに出会い縁ができるにつれて、都留での生活がたのしくなっていきました。暮らしのそばに湧水のある十日市場の散策。大学のうら山を抜けてたどりついた、小野の防空壕跡の取材。胴長を着て桂川に入り、水辺の記憶をたどったこと。都留にきたばかりのころは、先輩について歩く毎日が探検でした。ひとつ地域のことを知るたびに、まだまだ知らないことばかりだと思いきらされて、もっと知

りたい、と思うのです。

4年目の今になっても変わりません。鹿の角を探して山を歩いたり、地域のかたのお話を聞きながら「富士道」をたどったり。編集部に入ることで「探検」の機会や仲間恵まれました。鹿の角をひろうことは都留で叶えたいことのひとつですが、まだ見つけれられていません。「富士道」は、道中の石造物や寺院をめぐりながら歩みを進めていて、ようやく半分歩けたかなというところです。私は卒業して都留を離れますが、また違うかたちで、「探検」を続けていきたいと思えます。

(こうざい けい・社会学科環境・コミュニティ創造専攻4年)



『フィールド・ノート』  
編集会議の様子

『フィールド・ノート』編集に参加して

## 3年目で見えてきたもの

■ 前澤志依

昨年10月末に、『フィールド・ノート』10周年企画の一つとして、3名の編集部OB・OGの方と座談会をする機会を設けました。どういう経緯で『フィールド・ノート』が誕生したのか、どのように変化していったのか。その当時を経験してきた先輩方のお話を聞くことで、今まではバックナンバーを読んで想像していた冊子の移り変わりがより明確になり、過去と現在の違いに衝撃を受けました。

なかでも、「創刊当時はカラーページができることは想像していなかった」という言葉が印象に残っています。10年前は夢だったカラーページが今は現実のものになっている。カラーページだけでなく、大きさもA4からB5へ変わり、自分たちで行なっていた製本作業だけは今では印刷所に委託しています。外見だけみても10年間の歩みの中で『フィールド・ノート』が変化していることが窺えます。

また、外見だけでなく内容も編集部員が入れ替わるとびに変化します。読者の方からも時々「10年間続いているのに、まだまだいろいろな都留の一面を見ることができているのがすごい」といった感想をいただきます。毎号毎号の記事の内容は自然の変化から人々の営みまでさまざま。どんなに日常のありふれた情景でも、立ち止まってじっくり何度も見つめることで、何かしらの発見があったり、気になるできごとに出会ったりと見えてくるものはたくさんあります。

これはなんだろう？という小さな疑問が、記事を書くこと、自分が成長していくことの出発点です。そういった行動から見えてきた発見は、一読者でもある私も読んでいて、こういう見方もあるのかと、感動を覚えます。また、それと同時に編集部員として、私も読者に自分がとことん向き合った姿勢が伝わるような記事を書きたいとあこがれ、さらにやる気が出てきます。

私の記事を書くエネルギーの源はもっと知りたい、もっと挑戦したい、という尽きることなき探究心からきています。またそれは、私だけでなく、きつと過去も現在も編集部員みんながもっているもので、だから人それぞれの違った見方が生まれるのだと思います。私ももうすぐ4年生です。3年間書き続けてきましたが、まだまだ書きたいことがたくさんあります。これからも他の仲間とともに最後の最後まで書き続けていきたいです。

(まえざわ しより・国文学科3年)



校正作業の様子

## 『フィールド・ノート』の読者として

■上田 聖子

初めて手にした『フィールド・ノート』は第58号、地域交流センター通信は第15号、どちらも発刊が2009年です。ちょうどその頃、長女が幼稚園生、長男が2歳になり、わたしにも、周りに目を向ける余裕ができたのだと思います。数年間、ほこりをかぶっていたアンテナがびん！と音をたてました。とくに『フィールド・ノート』は企画、取材、原稿…と発刊までの全ての流れを文大生の手で行なっている知り、応援するような気持ちで毎号を楽しみにしていました。どんな学生さんたちがどのような思いで作っているのだろうか、それを垣間見たくて今回の地域交流研究フォーラムに参加しました。

フォーラムは北垣憲仁先生の進行のもとに進められ、「フィールド・ノートへの思いを語る」では、初代から現役編集部長、読者、学校教員など、7名の方が登壇し、それぞれの立場からその思いが語られました。編集に携わった方々からは、裏方の様子や、取材を通して築き上げた地域の方々との関わり、現在の自分を形成する基盤となった『フィールド・ノート』への思いが語られ、読者・取材を受けた方々からは、学生さんの取材に対する姿勢、もっといろんな方に『フィールド・ノート』を知ってもらいたいという思い、これからの『フィールド・ノート』への期待・可能性が語られました。

そんな様子を見ながらふと、これこそが『フィール

ド・ノート』なのではないかと感じました。北垣先生はじめ諸先生方がそつと見守り応援するなか、それぞれの学生さんが自分の心にはんのり灯った光をたよりに、目の前にひっそりのびた糸を手繰って手繰って……たどり着いたものの集大成が1冊となり、そこからまたのびた糸を手繰って次へと繋がり、いつの間にか市民の生活や環境、文化、人物と繋がっていく。わたしたち読者は『フィールド・ノート』を通して、学生さんがたどった軌跡と一緒にたどったような感覚になれるのです。発見して、興味を持ち、観察して、ふれあい、調査して、考察して、まとめあげるといって一連のわくわくを共有させてもらえて、しかもその対象がとても身近な存在であるというところが、面白いなあと思うのです。これからもたくさんわくわくを楽しみにしています。

(ついで) せいこ・都留市民



# 読者と考える『フィールド・ノート』の これまでとこれから

■藤森美紀

編集部員として私も関わっている『フィールド・ノート』が今年10周年を迎えました。地域交流研究センターの先生方をはじめ、地域の方や、これまで編集に関わってきた先輩方、読者のみなさまに支えられてここまで続いてきた『フィールド・ノート』ですが、私自身そういったご支援を頭では理解していても、実感できる場面は多くありません。

を応援していく立場になります。ですから、読者としての考えを発信していくことが大切だと感じましたという感想をいただいたときに、なるほどと思いました。編集する側として仲間たちと『フィールド・ノート』

をさらに発展させていくことは難しくなりますが、読者として『フィールド・ノート』をつくるお手伝いはできるのかもしれない。  
今回のフォーラムは私にとっても、『フィールド・ノート』にとっても刺激のある時間であったと感じています。

■別符沙都樹

2月2日に開催された地域交流研究センターのフォーラムは、『フィールド・ノート』を読んでくださった方々から、顔が見える場でお話を聞き、一緒に『フィールド・ノート』のこれまでとこれからを考える貴重な機会となりました。さまざまな意見や感想をお聞きするなかで、私がとてもうれしかったのは、『フィールド・ノート』は地域の人々も見落としてしまふようなことに気づかせてくれるもの、主体が考えていることがいきいきと書かれているという意見でした。私たちの書く文章から、つくりだす冊子から、そういう発見をしてくださり、また、文章にならない雰囲気といった部分まで感じてくださっているのだと、感慨深いものがありました。もちろん、もっと多くの人の目に触れるようにするためにはどのようにしていくべきか、誰に向けて書いていくのか、研究や記録を発信する場であってほしいといった意見をいただき、今後の課題も浮き彫りになりました。

## 『フィールド・ノート』 10年の重みとこれから

今年度私は『フィールド・ノート』の編集部に入りました。『フィールド・ノート』は発刊から10年ということでしたが、今までただ知らないことや分からないことを吸収することに精いっぱいでした。感は湧いていませんでした。そんななか今回このフォーラムに参加して、当たり前前のことではありますが、読者のかたは本当にいるのだということを実感したのです。『フィールド・ノート』という一冊の冊子に対し、たくさんの方が集まり、たくさんの方が冊子のことを考えている光景を見て、この冊子はこのようなかたがたに支えられているのだということとを改めて知るとともに、10年という重

みも目にする機会となりました。自分もひとごとではなく関わっているうちのひとりなのだと思ふと身の引き締まる思いです。

またフォーラムの準備にあたり、『フィールド・ノート』のバックナンバーを手に取りました。表紙を見るだけでも、ずっと変化し続けていることが分かります。その時そのときにそれぞれの冊子があります。一年目の私とは比較にならないほど多くの年月を『フィールド・ノート』とともにしている人がたくさんいます。私もこれからのまだ見ぬ『フィールド・ノート』を作り、ともにしてきたと言える一人になれたらと思うのです。

(べっぶ さつき・国文学科1年)

## 大学での博物館授業と駅舎での展示

■ 畑山ちえ

私は博物館学芸員資格課程内においてさまざまなことを学ぶことができました。そのなかの一つが授業で取り組んだ駅舎での展示制作の経験です。

私は夏休みに山梨県立美術館で実習を行ない多くのことを学びました。実習では、作品の展示方法の工夫についても学びました。これは、大学内の資格課程内の授業でも学習しましたが、実際に学芸員の方々から直に指導していただいたので、とても勉強になりました。今回の富士急行都留文科大前駅の駅舎を利用した展示は実習での経験が生かされました。

今回の展示は本学のキャンパスのビオトープ内で自由にテーマを決めるということでした。ビオトープ内を散策した後、私は、「ビオトープ内の植物で食べられるものはあるのか。人間と動物の食べる植物の類似点、相違点はどこか。」という単純な疑問が浮かび、ビオトープ内で食べることでできる植物を調べてみようと思う「天然フードコート」という題名で作品を制作しました。

私の作品の工夫点は3点あります。まず、デザインについてです。通常展示の配色は統一されますが、今回はカラフルにすることで他の作品と比較した場合、かなり目立った作品になったと思います。また、植物ごとにその植物を主食としている代表的な動物をキャラクター化し、その動物が解説しているようにしました。また、ビオトープの地図を手書きで制作しました。

手書きの温かさ、柔らかさが出たと思います。

次に、解説パネルについてですが、展示される駅の利用客は、幅広い年齢層のため、誰が見ても分かる作品にしようと思いました。そのため、解説パネルの文字の大きさはできる限り大きくし、ルビも振り、話し言葉にするなどしました。

最後に補足として、植物の食べ方を載せました。この補足は、単純に植物の紹介をただだけでなく、人間と動物の比較もすることで一味違った作品になったと思います。

反省点は標本に直接触れるハンズ・オンの要素を取り入れることができなかつたことです。実際に触ってみる工夫があればもっと良かったと思います。また作品を制作する際は、今回の経験を生かしたいと思います。

今回の展示後、知人から「作品可愛かったよ」など沢山声をかけてもらい、学芸員のやり甲斐を感じることができました。展示作品の配色や解説の内容を考えることは大変でしたが、作品を見た人の反応を考えただけでわくわくしました。また、図工が得意だったので作業はとても楽しく円滑に進めることができました。



学芸員の資格を取るにあたって、今回のように学外で展示することは多くのかたがたに見てもらえ、授業での学びの成果が具体的に実感できる点でも非常に有意義な経験となりました。

(はたやま ちえ・比較文化学科4年)

## わたしとあなたの都留アルバム事業をとおして

■ 森屋 雅幸

わたしとあなたの都留アルバム事業は、平成23年度に都留文科大学地域交流研究センターとミュージアム都留間において連携協力を推進する構想のなかで事業案として浮上し、それ以降事業を具体化するため、両者で話し合いを続け、平成24年度から事業が開始されました。

この事業では、都留市内で撮影された歴史や生活、自然の移り変わりを物語る風景写真や地域の暮らしづくりが伝わる写真などを市民の皆様から募集しています。ご提供いただいた写真はミュージアム都留の展示で使用させていただき、広く市民の皆様にかつての暮らしや地域の様子を知っていただくとともに、都留の歴史や文化を後世に伝える市民の共有の財産として保存することを目的に実施しています。4月から募集をはじめ、1月末現在までに628点の写真を市民の皆様からご提供いただきました。

古い写真の展示と保存という内容の事業は、他の自治体や博物館でも盛んに行なわれていますが、本事業が類似した他の事業と異なる点は、ご提供いただいた写真にまつわる記憶も保存していくことにあります。これは、写真をご提供いただく際に、写真に関しての思い出や感想を提供していただいた方から聞き取り、こうした記憶も保存して後世に伝えていくことを目的に行なっています。

写真の記憶の聞き取りは、提供者の方から行なっ

ていますが、提供者の方が、撮影者ご本人であったり、被写体として写真におさめられている方であったり、あるいは撮影者や被写体となった方がすでに亡くなつていて、子孫の方、親類の方であったりと立場はさまざまです。写真について聞き取りをしていくと、直接写真の思い出はお持ちでない方からも、写真に写る昔の風景や、被写体の人物をとおして、記憶やご感想をさまざまにいただくことができました。こうした聞き取りをとおして、写真の1枚、1枚には、単なる画像だけでなく、目に見えず、現在に残らない撮影者の想いや被写体になった場所や人物との思い出といった過去のさまざまな記憶がおさめられているからこそ、現在を生きる私たちにさまざまな想いを浮かび上げさせるのだと実感しました。

こうした事業の成果に基づいて、ミュージアム都留と都留文科大学地域交流研究センターでは、収集した資料を用いた企画展示を平成25年度冬期に開催する予定でおります。また、収集資料の図録作成も実施していく予定です。古い写真をお持ちの方はぜひ情報をお寄せください。

(もりや まさゆき・都留市教育委員会

学びのまちづくり課文化振興担当)



写真 (2)



写真 (1)

ご提供いただいた写真  
写真(1) 高尾町通りでの朝の体操の様子 昭和16年  
写真(2) 旧谷村裁判所外観(現甲府地方裁判所都留支部) 昭和20年代

# 大豆栽培を通して都留で学んだこと

■ 崎田史浩

都留市で大豆をつくりたいと思いついたのは、2009年の夏。今から3年半前であり、私たちが入学してまだ半年も経たない頃のことである。都留市の「里・山・水」をテーマに、半期にわたって「フィールド体験」を重ねるうちに、生活の身近なところにある里山や田畑、富士山の伏流水が流れる環境などに感動を覚えた。

「大豆をつくろう」という初期の動機は、授業を通して都留市や富士吉田市で栽培されている品種「アオハタ大豆」を用いて豆腐づくりを行なったこと、十日市場に工場を構える「紀伊國屋」が都留市の水資源を利用して豆腐の生産・販売を行なっている現場を見学したこと、また、朝日曾雌（あさひそめめし）にある組合がんにくを広く栽培し新たな特産品開発に乗り出していたことを実際に見聞きしたことが、大きなきっかけであったと言える。都留市には「アオハタ大豆」のような品種の大豆があり、水資源も豊かであり田畑にも通いやすい環境にあるこの地で、私たちが大豆を栽培し、食や農の分野から都留市を盛り上げていきたい。この想いが、「大豆生活」の出発点である。

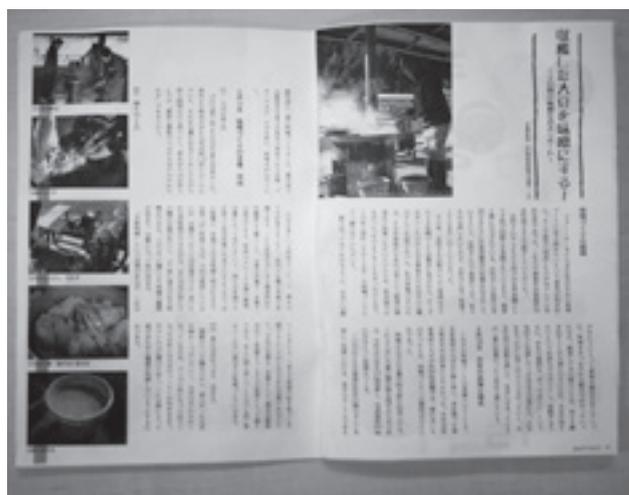
一度、大豆に目を凝らしてみると、この作物がいかに私たちの食生活に密着したものであるか、また生産の現状としては厳しいものかが見えてきた。私の大好物の納豆をはじめ、味噌や豆腐、醤油など日本人の食生活を下支えているものの原材料は大豆である。そ

れにも関わらず、実際に日本の大豆の栽培自給率は約5%であり、そのほとんどを一大生産地アメリカに頼っていることがわかった。

こうした事情もあり、日頃の生活のなかで具体的に考えていくために、2010年の春、大学から徒歩10分のところにある土地を借り受けて、大豆の栽培を行なうこととなったのだ。

私たちが借り受けた農地は約5アールの面積。単一の作物であるとはいえ、一定規模の土地で作物を育てることは初めてであった。そのため、事前学習として農家の方を何度か訪ねた。そのときに、安定して「商品」を生産されている方は、無農薬栽培の限界について教えてくださり、一方で、「食の安全」を重視されている方は、手間暇をかけて農業に向き合っていることがわかった。同じ大豆を育てるにあたって多様なある価値観の違いに触れて、私たちはどういった姿勢で大豆を育てていくのかを改めて問い直す機会でもあった。都留市で大豆を育てていく私たちが、本当に大事にしたいことは何か。それも、「大豆生活」のひとつのテーマになりつつあった。

そうしたなかで、都留市役所の清水一夫さんに指導していただきながら、私たちの大豆栽培は本格的にスタートした。1年目は、すべてが初めての経験であった。大豆を蒔く前の土の作り方や大豆の種の蒔き方、茎の根元に土を寄せることなど学ぶことは盛りだくさ



三年半にわたる活動をまとめた冊子

ん。無農薬の栽培と農薬を使用した場合の違いを観察するため、同じ土地を区切って栽培方法を比較することも行なった。

種まきから収穫、そして脱穀までは本当に丸一年かかった。ひとつの作物を、最後まで責任もって手をかけて育てることの大変さを痛感しながら、農業は季節の移り変わりや付き合いながら、丁寧にこなしていくものだと感じた。

当初は、大豆をつくってそれを都留市の農や食を盛り上げるところに目標を持っていた。しかし、大豆を育てた最初の年の終わりに、自分たちで収穫した大豆を使って味噌づくりを終えることで、作物をつくることは日々の暮らし、とくに食をきちんと自分のものにしていくことなのではないかと考えるようになった。旬に実りを授かり、寒い時期には保存食をつくり、1年分の蓄えを持つ。農に携わると、一年はあつという間に感じられ、気づけば翌年の春の準備に想いを馳せている。大豆を蒔き、収穫し、味噌をつくる。すでにこのサイクルは今年で3度目である。

3年間大豆をつくり続けてみると、身近な自然に密着した暮らしを営むことの大切さ、自ら暮らしを循環させていく食を生み出せることの喜びが今の「大豆生活」の支えとなっている。自分たちで1年、2年、3年とかけて作物をつくり続ける。学生生活の合間に満足に手をかけられたとは言えないが、それでも、農や食をまずは自分たちがしっかりと見つめ直すことを十分に出来た期間だったのではないだろうか。

「大豆生活」のメンバー一人ひとりの考えを掘り下げると、また異なる部分をみせる。なかには、実りが悪くなるとわかりつつも無農薬で育てることに意義を

感じているメンバーもいれば、都留市の風土を大豆栽培から感じ取ることに魅力を感じているメンバーもいる。関心は多様でありながら、根っここの部分では同じようにして農や食について学んできたように思う。

プロジェクト研究「大豆生活」として始まった活動も、有志団体として今また新たなメンバーに引き継がれようとしている。「大豆生活」に関わる動機や目標は人によってさまざまである。それを踏まえた上で「大豆生活」が、都留市の風土に学び暮らしを楽しむという姿勢を大事にしながら、一年一年実りある大学生活を送る手助けとなれば幸いである。

(さきた ふみひろ・社会学科環境・  
コミュニケーション創造専攻4年)

#### ■メンバーの所感抜粋

P13 「都留市においては食の安全、食の良さを生み出せるフィールドはたくさん存在する。…いかに興味ある人材にアプローチ、発掘するかである。買うのが当たり前の時代における自給の必要性を発信していきたい。」(中畠)

P19 「私自身はこの大豆栽培の活動を通して、農業というの『経験の積み重ね』であるということを実感した。なぜ農業をやっている人はあんなにも自信ありげに雄弁に作物や農について語ることが出来るのだろうか。言うまでもなくそれは自分自身で何度も実践し、その豊富な経験を余すことなくちゃんと記憶しているからなのだろう。」(加藤)



地域・故郷を思う—東日本大震災と私たち— (その4)

都留文科大では、東日本大震災発生後、社会学科教員の高田研さんを中心に、三回にわたって被災地での聞き取りを行なってきました。今回は、釜石市の中でも被害の甚大だった箱崎半島で24名の住民の方々からお話をうかがいました。調査には、複数の学科から学生16名が参加。その中の一人、宮下凌瑚さんに感想を寄せてもらいました。

岩手県釜石市における聞き取り調査に参加して ■ 宮下 凌瑚

今回の調査は、東日本大震災以前の集落の暮らしのようすと、震災発生以後の状況、また津波のようすを記録し、後世に伝えることを目的とし、岩手県釜石市で行なわれました。箱崎、白浜、仮宿、両石、桑の浜にて調査を行ないました。聞き取りの内容は、これまでの集落での生活、お仕事のようす、地震及び津波発生後の避難経路、海や津波の状況、避難所での生活、防災への取り組みなど多岐に渡りました。聞き取り調査は一問一答式ではなく、私たちが大まかな質問をしたことに対して自由に語って頂くという方式を取りました。

聞き取りを行なった方々が住んでいた、もしくは住んでいらつしやる集落の多くは海の近くにあり、そこに行くまでには細い道やトンネルを通らなくてはなりません。今回の聞き取り調査のなかではこうした私たちが集落に行くのに使ったトンネルが無い時代のお話や、歩いて山を越えて小学校に通ったこと、どのようなものを食べていたのかなど、昔の暮らしのようすを伺うことも出来ました。

東日本大震災後、被害を受けた人たちは「被災者」と呼ばれ、津波によって多くの建物や防波堤が壊された場所は「被災地」と呼ばれるようになりました。しかし、今回の調査で一人ひとりからお話を聞くことによって彼らは「被災者」ではなく、「岩手県の釜石市の箱崎町に住む〇〇さん」になりました。「被災者」という大きな括りで彼らを捉えるのではなく、一人の人として向き合い話をする事で今回の震災と、それによって起こったことを今までは違う視点から捉えられるようになったのではないかと思います。

また、調査のなかでも明治三陸津波やチリ津波のことを昔話のように聞かされていたために、迷うことなく避難することが出来て助かったという方が何人もいらつしやいました。そうしたお話をお聞きして、やはりあの3月11日に誰とどこにいて、何をしていた、どんなことを感じたのか。一人ひとりが持っている経験や思いを後世に伝えることは非常に意味のあることだと今回の調査を通して改めて感じました。

(みやした りょうこ・国文学科2年)



南都留地域教育フォーラムは平成10年の第1回から回を重ね、今年で15回目を迎えました。南都留地域の子どもたちに関わる各種団体の方々300名以上にご参加いただき、今年も11月2日に下吉田第二小学校で開催されました。

本年度のテーマは、これまでの経過を踏まえ、『子どもたちの教育は地域全体で担う』と設定しました。この大きなテーマについて、7つの分科会においては、より課題を明確にして話し合い、地域連携や地域交流の現状を確認し合いながら、今後の展望を探りました。

分科会に先立つ基調提案では、いじめの問題が取り上げられ、子どもたちが安心して学べる環境づくりと子どもたちの命に関わる問題には地域社会全体が連携し一丸となって取り組んでいくことの必要性を改めて確認し合いました。また、その後のアトラクションでは、「光っ子コンサート」として、富士学苑中学高等学校ジャズバンド部による躍動感と迫力のあるすばらしい演奏が披露され、参加者を魅了しました。

その後に行なわれた各分科会での内容を簡単に紹介いたします。

第1分科会（幼・保・小部会）では、保育園・幼稚園での課題を小学校へどうつなげるか、就学への意欲をどう育てるか、新たな連携の形について考えました。

第2分科会（小・中部会）では、「児童生徒の理科離れ」にスポットをあて、連携を通し

て子どもたちの自然科学に対する興味関心などのように育むかを探りました。

第3分科会（中・高部会）では、これからの地域に開く高等学校・大学のありかについて議論を深めました。

第4分科会（小・中・高児童生徒部会）では、「縦の連携を作る高校からのアプローチ」というテーマのもと、「小中高連携の活性化」を高校サイドから考えました。

第5分科会（行政・地域・学校部会）では、地域の子どもは地域で育てることの大切さ、体験活動を通して子どもへの自己肯定感を高めるための新たな取り組み等について話し合われました。

第6分科会（特別支援部会）では、「子どもの成長を見守る 就学時のよりよい連携のあり方」について、行政サイドと支援学校からの提案を元に議論されました。

第7分科会（PTA部会）では、「親の気持ち・子どもの気持ち・子どもの存在を認めるコミュニケーション」と題した参加型の講座を設定し、子育てについて皆で議論を交わしました。

これらの話し合いが、「子どもたちの教育を地域全体で担う」新たな取り組みの糸口となり、南都留地域の豊かな地域教育を推進するための大きな原動力となってくれることを信じています。

（たちかわ ひろし・地域教育支援スタッフ）

〈都留文科大参加者〉  
ご来賓、あいさつ  
第1分科会  
第2分科会

第4分科会  
第5分科会  
第7分科会

加藤 祐三 学長  
筒井 潤子 先生  
山森 美穂 先生  
（提案者 都留文科大 化学ゼミ4年生）  
井出優子  
加藤紗由美  
齋藤涼子  
湯村佳奈美  
渡邊明日香  
西本 勝美 先生  
杉本 光司 先生  
田中 昌弥 先生



全体会アトラクション富士学苑中学高等学校ジャズバンド部の様子



第1分科会の様子



第2分科会の様子

## 県民コミュニティーカレッジ「イギリスの文化」に参加して

### 「人から学ぶ」、「人と一緒に学ぶ」とくらしの面白さ

■ 倉内 紀子

昨年10月から11月にかけて都留文科大学にて県民コミュニティーカレッジ講座(テーマは「イギリスの文化」)が開催されると都留市の広報で知り、折しもオリンピックでイギリスやロンドンが注目された直後でもあり、興味がかきたてられ、参加してみることにしました。

参加への行動を駆り立てた大きな動機は二つあります。ひとつは、第1回から第5回の全5回に設定されていたテーマ「イギリスの文化入門」「イギリス英語を味わう」「イギリスを食べる」「イギリスのシネマを視る」「イギリスを踊る」を見たとき、意外と知らないのではないかと気付かされたことです。有名で長い歴史があるイギリスという国、その伝統や文化をこの機会にもっと知ってみたいと思いました。

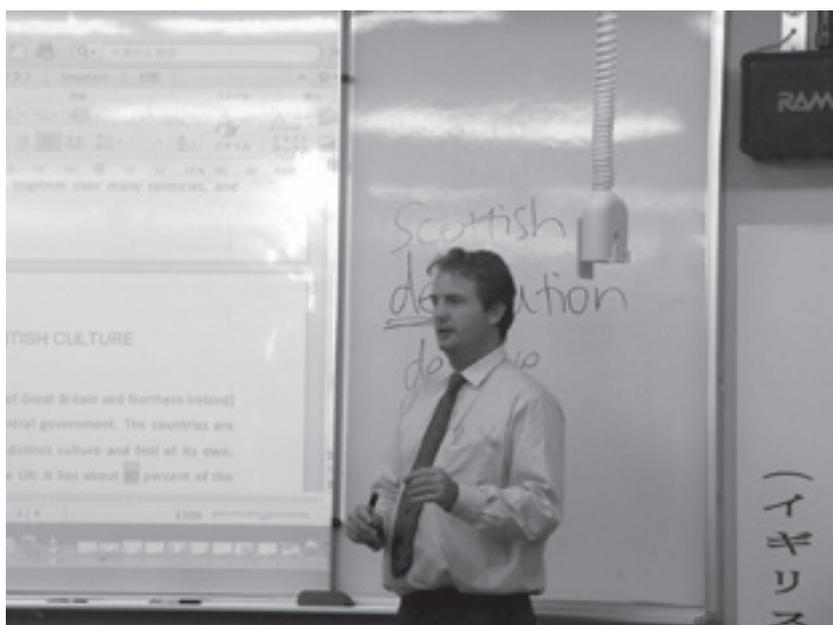
ふたつめは、講師が都留文科大学の准教授であるイギリス人講師で、英語での講義が受けられる、ワークショップ形式でグループで英語で話し合ったりできるということでした。個人的なことになりますが、大学時代に英語を専攻し、卒業後の就職先でも英語に関わった仕事をしておりましたが、出産を機に

英語から遠ざかっておりました。生の英語に触れ、使うことができるというのも大きな魅力となりました。

初回の講座を受けるまでは、期待と共に不安もありましたが、不安感は、ヘイミッシュ先生のお人柄とおもてなし、雰囲気作りで、完全に払拭されました。

ヘイミッシュ先生は、毎回、イギリスの紅茶とお菓子を講座の最初に用意して下さい、リラックスした雰囲気と話のきっかけを作して下さいました。また、時折交えてくれる日本語の単語が、日本の滞在が長くなければ出てこないだろうというものが多く、そのことが私達により一層の親しみを与えてくれ、ユーモア・ジョークもたっぷりで、笑わせてもらい、緊張感もほどよく解いてくれました。

講座全般は素晴らしかった、の一言につきまします。毎回のテーマに沿ったプリントとスライドが用意され、とてもわかりやすかったです。参加者のバックグラウンドも英語のレベルも違うであろうということも配慮されました。ペアチームによって答えを出させたり、多くのヒントによって答えを導いてく



れたり、知らなかった、出来なかったことなど全く意識せず、かつ、記憶に残るように工夫されています。英語で会話する機会も随所に折り込んでくださり、一方的な講義ではなく、参加型の講座であったことも楽しく参加し続けることができた大きな要因でありました。

2回目の講座からは、ヘイミッシュ先生のゼミ学生の何人かも参加するようになりましたが、若い学生との交流は、より場をなごませ盛り上げてくれました。

内容は、予想していたとおり、知らないことが多くて、あるいはなんとなく聞きかじっていた事柄がしっかりとした知識になり、大変勉強になりました。

講座が進むにつれ、イギリスが身近かに感じ、いつか実際に訪れてみたいと強く思えてきました。

一番、楽しかったのは、最後の講座「Scottish Dancing (イギリスを踊る)」です。まさか、本当には踊りはしないだろう、なんて思っていたのですが、イギリス人が実際に踊っている映像を見た後、そのステップを教えてもらい、数種類のダンスを先生、学生と一緒に踊りました。その国の文化の一部を身をもって体験でき、講座の最後を終えました。

◆ 日頃、何かを知りたい、勉強したいと思ったとき、本を読む、映像を見る、インターネット

トで調べるなど学ぶ方法は色々あります。今回、勇気を出して参加した講座ですが、学生の頃に戻って、「人から学ぶ」、「人と一緒に学ぶ」ということが、これほど楽しくて、かつ、頭や体の中に残るものなんだろうか、と、改めて実感できた機会でありました。

◆ ヘイミッシュ先生をはじめ、講座を企画し、支えて下さった方皆さまに感謝しております。また、講座に参加した方や学生の方々との交流も新鮮で、刺激的でした。この出逢いや感じたことを大切にしながら、「学び」を続けていきたいと思っております。ありがとうございました。

(くらうち のりこ・都留市民)



講師 南風島渉さん

## ナガラランドと植民地支配から連綿とつづく先住民弾圧

■ 佐伯奈津子

世界には知られざる紛争、意図的に隠された紛争が多数存在します。なかでもアジアの紛争には、日本の歴史や国益が大きく絡んでいます。その真実が報道されることは多くありません。地域交流研究センターは一月二一日、アジアの紛争地で取材されてきた南風島渉さんに、インド・ビルマ国境地帯のナガラランドについてお話しいただきました。

三〇以上の民族グループで構成されるナガ民族はモンゴロイド。現在は九割がキリスト教徒ですが、もともとはアニミズムを信奉し、焼き畑と狩猟採集を営むという、自然と語り合いながら生きてきた人びとです。のちにナガラランドの植民地化を試みたイギリスから、「世界でもっとも純粋な民主主義がある」と評されるほど、公正な社会が築かれてきました。

イギリスによる植民地支配はナガラランド全体の三分の一にしか及ばなかったにもかかわらず、現在まで深い傷を残しています。第二次世界大戦後のナガラランド独立宣言は国際社会から無視され、イギリスによって一方的に引かれた「国境線」は、ナガラランドを切り裂き、インドとビルマ（ミャンマー）に組み入れてしまったのです。

インド国軍・警察は、民族自決を求めるナガラランドを徹底的に弾圧し、二〇万人ともいわれるナガの人びとの命が奪われました。ナガラランドでとれる世界一辛い唐辛子ブート・ジョロキアが、ナガの人びとへの拷問でしばしばつかわれました。「治安維持」を名目に超法規的な措置をとる権力を与えられているインド国軍が、暴力や人権侵害の罪に問われることはありません。

このような惨状は、長いあいだ世界に伝えられずにきました。一九世紀後半にイギリスが設定した「奥地境界線規定」によって、ナガラランドは密室となっていたからです。二〇世紀末、ナガとインド政府のあいだで停戦合意が結ばれました。二〇一一年にはナガラランドへの入域制限も一部解除されましたが、インドによる軍事制圧状態は変わっていません。

いっぽうビルマ側に住むナガの人びとも、その人権を踏みにじられてきました。強制労働にかり出され、多数派であるビル

マ民族への同化（言語や宗教）を迫られてきました。インドで起きた悲劇と同じような状況にあると伝えられていますが、いまだ詳細は闇に包まれたままです。

ナガラランドは、アジア太平洋戦争末期、日本とイギリスが衝突した地点でした（インパール作戦）。日英双方が数万人の戦死者を出した戦場で、ナガの人びとも被害を受けましたが、その詳細はわかっていません。日本はまた、インド、ビルマの最大支援国でもあります。過去の清算が済んでいないだけでなく、現在もナガラランドへの弾圧に荷担してしまっているのです。「まず事実を知ってほしい。事実を知れば未来がみえてくる」（カカ・

D・イラル／ナガ人ジャーナリスト）。ナガの人びとの声に耳を傾けてみてください。

（さえき なつこ・  
本学非常勤講師）



ナガラランドの人々が使う道具や衣類を示しながら講演する南風島さん

## インターンシップを終えて

■竹田和海

社会学科環境・コミュニティ創造専攻では、学生が自ら開拓した研修先でインターンを行なうプログラムがあります。地域が、どのような仕事・活動によって支えられているのか、体験して得たことを寄せてもらいました。

大学卒業後は地元行政に携わりたいと考えている私は、昨年の8月20日〜31日に新潟県の上越市役所と同市頸城区総合事務所実習生として受け入れていただいた。

実習では中山間地振興や農業政策、施策に関する業務に関わった。これらの分野に関する講義は多数履修していたので、ある程度の知識はあると自負していた。しかし現実には対象地域や農業の数だけ特有の課題が存在するため、それぞれの実情を知らなければ有効な対応は行なえず、一律的な対応では殆ど効果は無いということを痛感させられた。印象的だったのが地産地消の拠点としてつくられた「あるるん畑」という農産物直売所を訪れた際、平日にも関わらず多くの人で賑わっていたことだ。生産者と消費者が直接交流できる、ただそれだけのこともかもしれない。しかし、だからこそ安心、安全が確保できるし、お互いのニーズを知ることにより生産者は農業への向上心が、消費者はまた利用しようとする良好な関係が形成され、地産地消のスタイルも確立されているのである。

また、世間では公務員に対し厳しい眼差しを向ける人も多い。改善すべき点もあるのだろうが、今回の実習ではむしろ、よりよい市民生活のために最善を尽くし公務にあたる姿を知ることができた。やはり物事は多面的に

インターンシップから学んだ  
バリアフリー観光の可能性

■重本香純

捉えなければ誤った思考に陥ってしまい、本質は見えてこないということも改めて感じた。

インターンシップは環境・コミュニティ創造専攻の必修科目であるが、自分が目指している職業を体験することができる、より深く理解することができる。たとえ将来について決

めかねていても、興味のある職業を体験することは、今後のことを深く考えるきっかけになる。これからインターンシップを行なう学生は、是非自分のため有効に活用して欲しい。

(たけだ かずみ・社会学科環境・

コミュニティ創造専攻3年)

昨年の9月、インターンシップで北海道旭川市にあるカムイ大雪バリアフリーツアーセンターにて一週間の研修を行いました。

カムイ大雪バリアフリーツアーセンターは車いすの利用当事者が集まった車いす紅蓮隊と旭川医科大学をはじめ、地域のさまざまな企業や団体等で構成する「特定非営利活動法人カムイ大雪バリアフリー研究所」が運営しており、だれにでもやさしい街づくりをテーマとし地域のバリアフリー化を推進しています。今回のインターンシップではツアーセンターの方と一緒に「旭川ものづくり博覧会」というイベントのお手伝いをさせていただきました。

インターンシップを通じて、いままで障がい当事者が、観光に限らず、余暇を楽しんだり街づくりに参加をすることなどから疎外

されがちであったことを知りました。しかし、当事者自らが積極的に動くことで周囲からの関心が高まっていくのだということを感じました。また主体となっている車いす紅蓮隊はメンバーのほとんどが20代と若く、その元気と明るさに引き寄せられて周囲の人々も集まってきた感じにも感じました。研修中、障がいを持った当事者の方から「観光のバリアフリー化をすすめることで地域の活性化にも貢献できれば嬉しい」という言葉をうかがって、障がい当事者と地域住民が協同し、バリアフリー観光に取り組むことで、結果としてよりよい街づくりにもつながることが可能なのではないかと思いました。

(しげもと かずみ・社会学科 環境・コミュニティ

創造専攻 4年)



## ● ● 編集後記 ● ●

2004年の春、着任から間もなく、地域交流研究センターに関わるようになって、大学と地域の人たちとが、どのようにつながろうとしているのか、触れる機会にめぐまれた。当初は「暮らしと産業」という部門に位置づけられて、「産業」という語感に戸惑うこともあり、「産業」を「仕事」と変えていただいた。「産業」は「鳥の目」で見た経済活動で、もう少し等身大の視点から地域と関わるのが、学生にとっても、私にとっても取り組みやすいと考えたからである。出荷高とか事業高とか、データとしてみれば「衰退」のレッテルを貼られる「産業」や「地域」も、その人（たち）の暮らしや人生にとってはかけがえのない営為・空間である。当然のことではあるが、学生たちとさまざまな生業のお話をうかがい、そのことをいっそう実感してきた。

ところで、「地域」を「虫の目」で辿ると同時に、国を越えたところでの、人々の苦悩にも目をむけたいと考えた。国際的な紛争地に自らも身を置きつつ、そこでの暮らしや文化を伝えてくださる講師陣にも、本学は恵まれている。「彼の地の苦悩」と「この地で生きること」とをつなぎ合わせようという試みは、大変難しく、私自身も全く出来ていないが、続けるべき挑戦だと考えている。

諸々のことが志半ばの感はあるものの、この3月で、都留文科大学を退職する。『センター通信』の題材を探す意味もあって、大学の教職員と、仕事を離れた話題におよぶときがしばしばあって、お互い、意外な一面を発見しあうこともあり、それも編集という仕事の貴重や副産物だった。地域交流研究センターに関わることで、いろいろな角度から地域を考える機会をいただいたことに深く感謝をしつつ、最後の編集後記にかえたい。（田中夏子・副編集長）

巻頭文は、本誌の副編集長である田中夏子さんに執筆してもらいました。私たちは簡単に「聞く（聴く）」ということを言いますが、田中さんはそのことについて、多くの経験をもとに人間的な行為として吟味され、「聞き書き」実践の社会的広がりを確認しつつ、3・11以降の自らの実践意思について述べておられます。そのことばは、私たち一人ひとりへの呼びかけのように響いてきます。

さて私たちは今日、急速で巨大な社会変容の只中を生きておりますが、その過程で私たちは、ごく身近な自然・生活に目を向ける注意力、「私たち自身の心を働かせる」能力を衰弱させてきているように直感されます。本号の特集は、地域交流の多彩な実践を、この「私たち自身の心を働かせる」という角度から目を向け、そのことが孕む大事な諸価値について考えようとしてきました。

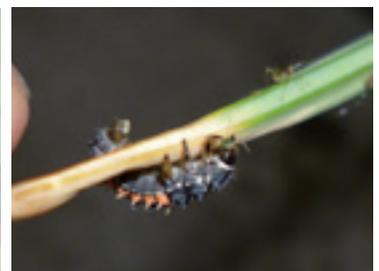
そのようなことを考えるヒントになった私自身の経験について一つ。私は本学の「テントウムシの越冬を見守る会」（本誌19号20p参照）の会員ですが、昨年初夏に、偶然にも自宅（東京）のベランダのクローバーの鉢でテントウムシが卵を産み成虫となっていく過程を観察することができました。その幼虫がアブラムシを盛んに食し、また脱皮していく一連のさまを家庭用の小さなデジカメで撮影することができました。本誌読者のみなさん、テントウムシの幼虫をご覧になったことがありますか？

次号は『『地域交流センター通信』10年の歴史を振り返る』を特集する予定です。

【訂正】前22号26頁の執筆者「三枝泰子」氏の読み方を間違えて記しました。正しくは「さいぐさ たいこ」です。訂正しお詫びいたします。（畑潤・編集長）



脱皮を終えた直後の  
テントウムシ



アブラムシを食べるテントウムシの幼虫

絵・成瀬洋平

地域交流センター通信 第23号：2013年3月18日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（編集長・畑潤 副編集長・田中夏子 杉本光司 佐藤肇 坂田有紀子 鳥原正敏 品田笑子 北垣憲仁 本田祐士）  
発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341 (代)

統括編集者：北垣憲仁